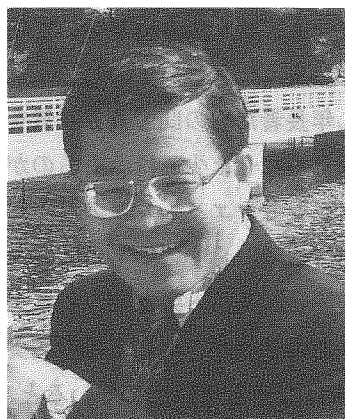


田坂完二氏を偲んで

田坂完二さんの死去を悼む

法政大学

中嶋 龍三



平成7年2月14日、田坂さんが亡くなられたということを東芝の吉田さんから知らせて戴いて、まったく驚きいった。しかしながら、あの小さな体全体がこれエネルギーといった感じの田坂さんが、昨年夏以降2回開かれた崩壊熱評価ワーキング・グループの会合に病欠欠席されたこと自体、今にして思えば異常なことではあった。研究者として、はたまた教育者として、これからもっともっと活躍してもらえるものと大いに期待していたものだから、彼の病状がそれほどにまで進行していたとはつゆほどにも考えられなかったので

ある。

どんなに気むずかしい人をも笑わせるような、しかしそれにもかかわらず結構辛辣な冗談を言う、そしてまたいたずらっぽい、あるいはそれだからこそ人なつっこい色の黒い小熊 いや、熊と相撲をとった金太郎か? といった感じの田坂さんだった。そんな彼と幽冥あい隔てることになったいま、いろいろなことが湧き水のように想い出されて筆を執る手はただただ鈍るばかりである。でもはっきりいえることは、真剣な顔つきで議論したときでも、冗談をいいながら酒を飲んだときでも、いつも『田坂=活発な小熊』という楽しい雰囲気醸し出す羨ましいほどの人徳をそなえた人だったということである。

田坂さんは、はじめから原子炉安全問題に取り組んでおられたようで、シグマ委員会が崩壊熱評価ワーキング・グループを発足させた1975年頃にはすでに、新進気鋭の研究者として核分裂生成物の崩壊熱に関して注目すべき成果を発表していた。日本原子力学会賞(奨励賞だったように思うが.....)の審査員を委嘱されて彼の論文をいくつか見て感じたことは、得られた成果を明確に自信をもって纏めているので非常な力強さが溢れているということであった。これは、あれからの20年を共に歩んできていつも感じていたことでもある。ある意味では、強引に力でねじ伏せるような荒々しさを印象づけ

られるかも知れないが、しかしそれは、問題に立ち向かうときの彼の透徹した洞察、不撓不屈の信念、勇猛果敢な実行力の象徴である。エネルギーの塊のような田坂さんのこのパワーが、大学教育にも、あるいはシグマ委員会活動にも今から大いに発揚されることと楽しみにしていた矢先の彼の訃報、本当に残念でならない。

ルードヴィッヒ弦楽四重奏団の第二ヴァイオリン奏者として毎年演奏会を開き、ベートーヴェンの弦楽四重奏曲全曲を数年にわたって一巡して一昨年だったか二巡目に入り、ますます頑張るぞと張り切っていた田坂さん。はじめのうちは田坂さんのヴァイオリン、とりわけ彼の右手が操る弓が妙に大きくみえて、果たして終わりまで弾きとおせるかなとちょっと心配したこともあったように記憶する。そしていま、眼を大きく見開いて精神をヴァイオリンにあるいは譜面に集中していた彼の姿が脳裏に焼き付いている。

茶目っ気というのは一つの人徳とみてよかろう。しかし年長者たちの間で茶目っ気を振りまく人でも、自分より若い人たちの前では程度の差はあるにせよ少しは改まるのが普通であろう。ところが、たとえばチャイニーズ・レストランでウエイトレスのたどたどしい日本語をまねて注文する田坂さんは、学生たちの前でも気取らずいつもとまったく変わらぬ茶目っ気で他の人たちを笑わせる。だから彼の場合、茶目っ気というのは身についたいわば彼の人格の一部とみてよさそうである。あの学究が、そしてあの演奏者が、あんな時にこんな茶目っ気を示したことがあったけなどと思い出していると、自然と笑いがこみ上げてくると同時に悪戯っぽい目をした金太郎の姿が髭髯としてくる（黒い小熊の姿が二重写しのようにちらつくのは、涙のせいだろうか）。

なにはともあれ、田坂完二さんに逝かれたことはわれわれの深い悲しみであり、また大きな損失である。田坂さん！さようならとはいいたくない。田坂さん！戻ってきてください。

田坂さんとの20年

（株）東芝

吉田 正

ここに一枚の絵はがきがある。筆まめではなかった田坂さんの旅先から音信とは珍しいなと思いつつ、風景の美しさに惹かれ、机に大切に飾っていたものだ。入院のわずかひと月まえの日付で、いまにして思えば、これが私への田坂さんの最後の言葉になってしまった。文面はとても田坂さんらしい。「ドナウの畔、センテレドレのレストランで

時を楽しんでいます。Tokay、white wine、キャビア、フォアグラ、……そしてエスプレッソを飲みながら。……Friendship。田坂完二」とある。

時を楽しんで生きること。酒も、会話も、音楽も、そしてもちろん仕事も。この、田坂さんが終始おくりつづけてくれたメッセージは、ここでプツリと途絶えた。ご病態を常に気に掛けていながら、こうなる可能性を意識から追い出し、崩壊熱ワーキンググループの会合を何月まで延ばせば田坂さんに出席してもらえるだろう、などと暢気に考え続けていた。あの田坂さんに限って……。そう、飯島俊吾さんの時も同じだった。あの飯島さんに限って……。どうも私は人生から何も学びとっていないようだ。

田坂さんに始めてお会いしたのは1970年代のはじめ、シグマ委員会が崩壊熱計算とその為の核データの重要性に着目し崩壊熱WGをスタートさせた時だった。入社したばかり、右も左も分からない私は発足と同時にこのWGに参加させて頂き、田坂さんの知遇を得た。それから二十年余。田坂さんとは常に変わることなく頻繁にお会いし、一緒に酒を飲み、お話を伺った。寸鉄人を刺すメッセージも、悪童っぽい言葉づかいで大いに和らげられ、心にスッと入った。私の記憶の中には、田坂語録を収めた引き出しがある。でも、ここでその引き出しを開いてみることはすまい。「ヨシダーッ。君は論文の数がすくないんだよ。もっと書かなくちゃダメよ」、などという田坂さんの言い回しをそのまま引きうつしたのでは、あの周囲への（外見に似あわない！）細やかな配慮や人への心づかいが消えてしまう。かといって、あたりさわりのない言い回しに翻訳しては、田坂さんの言葉ではなくなってしまう。

私の30才代の最良の仕事のひとつは、田坂さんの60年代終わりの業績にその端を発している。田坂さんはそれを終始支えて下さった。田坂さんへの感謝はこの一事に触れるにとどめておきたい。東海、東京、名古屋、さらにはスタツビークで、共に過ごさせて頂いた楽しい時々を書きつづいたらきりが無い（そうしてみたい誘惑にかられるけれど）。名古屋大に移って田坂さんは田坂先生になられた。でも私は終生「田坂さん」と呼ばさせて頂いたし、ここでもそうさせて頂いた。田坂さんを知る方なら、その理由をきっと解って下さるでしょう。次回のワーキンググループ会合にも、地下二階の中華レストランにも、田坂さんはもう現れない。私にはいまだにそれがとても奇妙なことのよう to 思われます。